

《ポーランドの伝説》

黒衣の公爵夫人の幽霊伝説

栗原 成郎

シャモトウウィの「黒衣の公爵夫人」の幽霊伝説は、同じヴィエルコポルスカ地方のクルニク城の「白い貴婦人」の伝説と好一対をなす(本誌第87号参照)。

シャモトウウィ Szamotuły はポズナンの北西35キロ、人口1万9千ほどの小さな町で、中心部の公園のシヴィエルチェフスキ通りに「ハルシュカの塔 Baszta Halszki」と呼ばれる煉瓦造りの高い建物がある。中世に権勢を誇った豪族の城の名残の一つである。城は1513年にポズナンの県知事ウカシュ・グルカ2世 Łukasz II Górką (1482-1542)の所有に移り、1518年にグルカはこの塔を住居兼防衛塔として建造させた。

のちに、この塔の近くで夜ごとに若い黒衣の貴婦人の姿が見られるようになったという。

第二次大戦が終って間もなく、シャモトウウィの古い住民の一人ピョートル某(なにがし)という男が、ポズナン市への出張の帰り途、夜の11時ころ塔のそばを通ると、月の光に照らされて女の姿が浮かび上がった。女は黒のラシヤの喪服を着てゆっくりと池の方角へと歩を進めていた。女がひとり公園を散歩する時刻ではなかったの、彼は驚いた。若い女性のように、どこかへ急ぐ様子もなかった。不思議に思って立ち止まると月が雲に隠れ、再び月が現れたときにはもはや誰の姿も見えなかった。

家に帰ってこの出来事を妻に話すと、妻は少しも驚かず、ただ感慨深げに、それは子どものころ話に聞いた、有名なハルシュカに違いないと言った。ピョートルの妻の両親と祖母は、特に秋、塔の周囲を歩き回るハルシュカの幽霊を何度も見たという。また塔の中から溜息と呻き声が聞こえてくるという話も聞いていた。

Jan Matejko (1838-1893) 画「スカルガの説教」(1864)より：右が若いハルシュカとされるが、画題はズィグムント3世(1566-1632)時代の出来事でハルシュカの没後であり、時代錯誤があるとも言われる。



シャモトウウィには黒衣の公爵夫人の話がさまざまなヴァージョンで伝えられている。



ハルシュカの塔(左)とグルカの館
Photo: Stanisław Nowak, 2007

若い公女は御付きの小姓が好きになり、立腹した父親が娘に鉄仮面をかぶせて塔に閉じ込めたともいう。あるいは公爵夫人は不貞の妻ではなかったのに、姦通罪で残酷な刑罰を受けたともいう。

最もよく知られた伝説では、嫉妬深い夫のウカシュ・グルカ3世 Łukasz III Górką (1533-1573)が、美貌の若い妻を自分以外の男に見られないよう、妻の顔に鉄仮面をかぶせて塔に監禁したという。

ハルシュカは仮面で顔を覆ったまま地下の回廊から塔を出て、近くの教会のミサに参加し罪を告解した。陰鬱な月夜には塔の近くを告解用の衣装に身をつつんだ女が音も無く歩く姿が見られ、女が塔に姿を消すと塔の厚い壁越しに、薄幸のハルシュカの押し殺した忍び泣きの声が聞こえたという。

ハルシュカ Halszka の愛称で知られる女性は、エルジュビェタ・カタジナ・オストロクスカ Elżbieta Katarzyna Ostrogska (1539-1582)といい、公爵イリヤ・オストロクスキ Ilija Ostrogski (1510-1539)とベアタ・コシチェツカ Beata Kościelecka (1515-1576)の娘であった。オストロクスキ家は14世紀末から16世紀にかけてリトアニア大公国で枢要な地位を占めた大貴族の一門で、西ウクライナのヴォルィニのオストロク(ポーランド語 Ostróg、ロシア語 Острок)に居城を持ち24の都市を支配した。父イリヤはリトアニア・ポーランド連合王国内の広大な領地を治めていた。

才色兼備で知られた母ベアタは王室財務官アンヂュジェイ・コシチェツキ Andrzej Kościelecki と宮廷女官カタジナ・テルニチャンカ Katarzyna Telniczanka の娘であったが、ズィグムント1世(老王) Zygmunt Stary (1467-1548)の婚外子であることは公然の秘密とされた。ベアタは老王の2番目の妃ボナ・スフォルツァ Bona Sforza (1494-1557、イタリア出身)に女官として仕えた。

ハルシュカは1539年にオストロクで生を享けたが、誕生前に父親は亡くなり、それが彼女の悲劇

的運命の因(もと)となった。娘は16世紀西ヨーロッパのいくつかの公国よりも強力なポーランド・リトアニア連合王国の中でも、最大の侯国の一つである領地の莫大な資産の相続人となった。父イリヤは自分の死の近いのを予期して、生まれてくる子の正当な後見人に叔父[イリヤの腹違いの弟]のワスィル・オストロクスキ Wasył Ostrogski (1526-1608)とズィグムント2世アウグスト王 Zygmunt II August (1520-1572)を指名した。父の早すぎた死の後に生まれた女兒は絶世の美女に成長し、近隣の数多い分封侯国のどれにも勝る莫大な財産の相続人というおとぎ話のお姫様のような存在だった。

当然、ハルシュカには求婚者の群れが殺到した。中でも最も熱心な求婚者は、姫の後見人ワスィル・オストロクスキの甥、若き候ディミトル・サングウシュコ Dymitr Sanguszko だった。姫はまだ14歳で、母親のベアタはいったん求婚者に与えた結婚の約束を取り消した。だが若い候は結婚を断念する気は毛頭なく、後見人たる叔父のワスィルと共に80人のコサクを引き連れてオストロク城を攻撃した。短い小競り合いののち城は明け渡され、ディミトルは婚約者の前に立った。急ぎ呼ばれた司祭が即席の結婚式を執り行い候と姫を結び、ワスィル公が結婚の証人になった。1553年9月6日のことだった。

しかし母ベアタはこの既成事実を承認せず、ズィグムント・アウグスト王に苦情を訴えた。ハルシュカの後見人でもある王は激怒し、ディミトルに「死刑と名誉剥奪」を言い渡した。夫は若妻を連れてポヘミアに逃亡したが、別の求婚者マルチン・ズヴォロフスキ Marcin Zworowski が一族郎党を率いて二

人を追跡し夫を殺害した。

ハルシュカはポーランドに連れ戻され、ズヴォロフスキはハプスブルク家の主権を犯したかどで神聖ローマ帝国の官憲に逮捕・投獄された。ポーランド王の直接干渉により彼も帰国はできたが、時すでに遅く、王は若き未亡人の再婚の手筈を整えていた。

ハルシュカのつぎの嫁ぎ先は、ヴィエルコポルスカの大貴族、ポズナンの知事でシャモトウウィの領主ウカシュ・グルカ3世だった。結婚式はワルシャワの王宮でポズナン司教の司式により盛大に挙行されたが、母と娘はこの王の独断専行に不服で、ルヴフの修道院に身を隠し、おそらく母親の意志で娘はリトアニアのスツキ公シエミョン・オレルコヴィチ Siemion Olelkowicz と再婚した。

これに感情を害したズィグムント・アウグスト王はハルシュカを修道院から連れ出すよう命じ、法律上の夫に引き渡した。グルカは妻をシャモトウウィに連れ帰り、彼女は1559年から1573年までそこに留まったが、王が死に夫にも先立たれると、父方の叔父ワスィル公の手で故郷ヴォルニニへ戻された。

ハルシュカは母の強い影響下にあり、徹頭徹尾母に従順な娘だった。その母も3年後に世を去る。

さらに6年後、ハルシュカは狂気のうちに43歳の生涯を閉じた。彼女の精神錯乱は三度の不本意な結婚に翻弄された悲劇的な体験に起因すると考えられる。ハルシュカの不幸な運命は、宮廷につながる母親ベアタ、叔父ワスィル公、ズィグムント・アウグスト王らの間の反目、権力争い、巨万の財産をめぐる葛藤の結果であった。(くりはら しげお)



ポーランド情報誌『エクセレントポーランド～ライジングポルスカ～もっと知りたいポーランド』3発行

ポーランド共和国大使館が全面協力した、好評のポーランド情報誌(シルバーストーン JP 刊)の今号には、東京・ワルシャワ直行便が就航した LOT(ロット)ポーランド航空のプロモーションのほか、文化面では昨年開催された第17回シヨパン国際ピアノコンクールにちなんでシヨパン、およびタデウシュ・カントル生誕百年の特集や、シロンスクの「ヨーロッパ産業遺産の道 ERIH」が紹介されています。

今年ワルシャワで開催される「世界女性サミット」と、クラクフで開催される「ワールドユースデー」に先駆け、両都市を舞台とした大変興味深い記事もあります。

また、高円宮妃殿下、中曽根弘文(参議院日本・ポ

ーランド友好議員連盟会長)、額賀福志郎(衆議院日本・ポーランド友好議員連盟会長)、遠藤郁子(ピアニスト、当会会員)氏らも紹介されています。

本体 1,500 円。お求めは紀伊國屋書店、版元等へ。

なお、本号でも紹介されているポーランド国立民族舞踊団「シロンスク」の DVD が、ポーランド広報文化センターより当協会に寄贈されました。ご利用ください。

(尾形芳秀)

